
夢語り

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢語り

【Nコード】

N1916M

【作者名】

石子

【あらすじ】

短編のみ。一話ごとに完結。

あの桜の木

しんしんと、桜の花びらが舞い落ちてくる。

それは儚い夢のようで、手にした途端その美しさが消えてしまうように思えた。

俺と女は縁側から庭を眺めていた。

女は俺を訪ねてきたと言った。俺は君のことは知らない、と答えた。

浮かんだ疑問をいくつか聞いてみたが、女はもうすぐ分かりますとだけ言い、ちつとも要領を得なかった。

ただ、庭の桜を見せてくれとあまりに熱心に頼むので、庭に面する部屋に通して縁側で桜を眺めているのだった。

「私が埋められたのはあの辺りですわ」

唐突に、女は言った。

何のことかさっぱりわからない。俺は女をこの庭に案内してしまったことを少し後悔した。

「ほら。あの辺り。覚えておられるかしら？」

女は、この広大な庭に何千本も咲いている桜の木を見ながら、一点を指差してそう言った。

俺には正直、女がどこを指しているのかもわからなかったしが適当に相槌を打っておいた。

女は、ふふと笑った。

「本当は覚えておられないんでしょう？」

何もかもお見通しとばかりに女はそう言った。

俺は面白くなかった。俺はこの女のことを知らない。

「埋められたなんて言いながら、君はここにいないじゃないか。くだらない冗談はやめてくれ」

つい、そんな言い方をしてしまった。

「あら。あなた達が私をお埋めになっただけですよ」

また、女は穏やかに笑った。

俺はやはりおもしろくなかった。

そもそも、この女は誰だ？ 記憶をたどっても何も引つかからなかった。

……それどころか、俺はほんの何年か前までしか記憶を遡れない事に気付いた。それ以前のことか思い出せないのだ。

なぜだ？

記憶をなくした覚えすらない。俺は今まで自分の記憶が途中で切れていることを知らなかったのだ。

……自分自身のことなのに？

そういえば俺はこの屋敷を出たことがない。正確には、思い出せる範囲では屋敷を出た記憶はない。

もしかしたら、この女にはずっと前に会っていたのかもしれない。

「君は俺のことを知っているようだが、いつ俺に会ったんだ？」

女は少しの間、首を傾げて考えているようだったが、やがて口を開いた。

「十年くらい前かしら？」

それを聞いても何も思い出せない。

そんな俺達の遣り取りなどはもちろん関係ないとばかりに、庭の桜は風が吹くたびに自分の美しさを見せ付けるかのように花びらを散らす。身を削ってまで一時の美しさを競うその姿をぼんやりと眺めながら、そういえば以前もこんな風に桜を見ていたことがあったかもしれない、という気持ちになる。

しばらく、俺も女も口を開かなかった。会話がなければ、他には桜が風に揺れる音だけだ。

なんて心地いい静寂なんだろう。

俺は、ひどく浮遊感を覚えた。

そんな俺の方を見て、女は訳知り顔でゆっくりと頷く。

不愉快だったが、心地好かった。

その時ふと、蘇った記憶がある。思い出す時期が来たのだろう。

俺はもう七年も前に死んだのだ。病気で。前々から治らないと診断されていた。

未練が一切ないと言うと嘘になるが、覚悟は出来ていたはずだ。なら、俺がここにいる理由はなんだ？

考えはじめるとすんなりと記憶が押し寄せてきた。そうか。今までは俺が思い出そうとしなかったから思い出せなかったのか。

俺には妻がいた。俺の病が治らないことを彼女は知っていた。

俺はいつも「俺は明日にでも死んでしまいかもしれない。その時は君は一刻もはやく俺のことなどは忘れてくれ」と冗談混じりに言った。しかし、本心からそう思っていた。俺は妻を愛していたのだ。段々と衰弱して布団で過ごすことが多くなり、近くの土手に出向くことすら難しくなっていた。毎年恒例にしていた花見も諦めるしかないようだった。

そんなある時、彼女は俺の体調が良い時を見計らって、俺を庭に引っ張り出した。

『庭に桜が咲いていれば、また二人で毎年桜が見れるわ』

いきなりだったので俺は驚いたが、妻は意気揚々と桜の種を庭に蒔いた。なんだか俺も楽しくなって一緒に手伝った。

『この桜が咲いたら、お花見をしましょうね』

……お互いに分かっていた。きっとこの桜が育って花を咲かせるのは十年近く先の事になるだろう。

それまで俺はもたない。

『ああ。そうだな』

それでも俺は、妻と一緒に蒔いたこの桜の花を見たいと思った。

ようやく、俺の中で記憶が繋がった。

「思い出されましたか？」

「確か、種を埋めた翌年には、芽が出たと妻が嬉しそうに報告してくれたんだっとな」

「ええ。今年、初めて花が咲きました」

女は言った。よくよく見ると、女は俺の妻に面影が似ている気がした。しかし妻ではない。

先ほどこの女が指を差した辺りにもう一度目を遣ると、大きな木々に囲まれて気付かなかったが、確かに小さな小さな桜の木が花を咲かせていた。

それを報せに来てくれたのか。

「そうか」

俺がそう呟いたのを聞くと、女は満足そうに笑顔になった。そして、ひととき強い風が吹いて桜の花びらが舞った時、女はその風に身を任せるように消えてしまった。

そして、俺の意識も空中に霧散するごとく薄れていく。

一緒に見ることは叶わなかったが、妻もこの小さな桜を見ているだろう。

俺は幸せだった。彼女にもそれが伝わることを願う。

約束ね

真つ暗な廊下に懐中電灯の光だけが頼りなげに揺れる。

私は、繋いでいる妹の手を握り直した。妹は小さな冷たい手でぎゅつと握り返してくる。

夜の小学校。

昼とは全く違う雰囲気を醸し出すこの空間に私は少し怯えていた。こんな遅くに学校の廊下を歩くのなんてはじめてだ。

友達と寄り道をしていてすっかり帰りが遅くなった私が、たまたま通りかかった時に校門のところにいる妹を見つけた。

こんな時間に何をしているのか不思議に思つて声をかけると、明日までにやらなくちゃいけない宿題のプリントを忘れて帰ったのでわざわざ取りに学校に戻ってきたらしい。なんだか可哀想になつて、仕方なく一緒についてきてあげたというわけだ。

意外にも学校の出入り口は閉まつておらず、中に入るのは簡単だった。校門の近くにある用務員室を覗いてみたが、そこには誰もいなかった。

そこで懐中電灯をちよつと拝借して校舎の中を突き進んでいる。もちろん行き先は妹の教室。暗くて先の見えない廊下を歩いていくところだ。

しん、と静まり返つた暗闇に足音だけが響く。なんとなく、できるだけ足音を立てたくなくて忍び足で歩く。

窓からは月明かりが差し込み、多少は周りが見えるが、暗くのしかかってくる空気に変わりはない。

「結構遠いね、教室まで」

気を紛らわそうと妹に声をかける。

「そつだね……」

妹も闇の雰囲気気圧されているのか、短く返事をするだけだつ

た。

懐中電灯で教室の入り口に掲げてあるクラスの表示を照らす。

妹は三年生のクラスだ。

ようやく教室にたどり着き、ちよつとほつとする。が、怖さが収まったわけではない。

ガラッと引き戸を開けて中に入る。その音も必要以上に大きく聞こえて、心臓が縮み上がる思いだった。

「早く取っておいで」

言つて、妹を自分の机のある方に向かわせようとしたのだが、繋いでいる手をさらに握りしめてきて一向に動こうとしない。

不思議に思つて、妹が見ている方向に私も目を向ける。

特に何もない。椅子や机が整然と並んでいるだけだ。

やはり怖くて進めないんだらうか。そう思つて、教室の電気のスイッチを探した。

本当は、明りを点けたら誰かに見つかりそうだし、さつさとプリントを取つて帰リたかったのだが。先生に見つかったらとやかく言われそうだしね。でも、少しの間なら電気を点けても見つからないだらう。

そんな風に考えて、やはり手を繋いだままスイッチを探す。

その時、あれ？ と思つた。昔、今と同じように暗い校舎を手を繋いで歩いたことがあつた気がする。

そうだ。

私が小学校三年生の時だ。

次の日に提出しなければならぬ宿題のノートを学校に忘れてしまい、それを取りにきた時。

思ったよりもひっそりとした校舎に怯えて、私はなかなか中に入れないでいた。その私と一緒に手を繋いで教室までついて来てくれたのだ。

『わたしも三年生なの』

彼女はそう言つたはずだ。知らない子だった。違うクラスの子だ

ろうと思った。

その時はその女の子がなぜそんな遅い時間に学校にいたのかは気にならなかった。ただ、誰かに一緒にきて欲しいだけだった。

『わたし達、もう友達だよね。ずっと一緒にいてくれるよね』

その子が言った。私は、わかったという感じの答えを返したと思う。

そして、無事にノートを取って……。

それから？

……………。

『ここにいてくれるんじゃないの？』

執拗にそう言う女の子に恐怖を感じた私は、その子を振り切って家に帰ったのだ。

「ねえ、今度こそ、ずっと一緒にいてくれるよね？」

明りのスイッチをまだ探せないでいた私に聞こえてきたのは、あの時の女の子の声だった。

ようやく気付く。

……私に妹なんて最初からいない。

繋いでいた手がぐつと握られ、急に重くなる。

私は、もう逃げられないのだと悟った。

出られませんよ

また行き止まりか。

思わず舌打ちをして、もと来た道を引き返す。

湿気のあるひんやりとした空気を振り払うように、持っていた不完全な地図に乱暴に印をつけた。

約半日歩き回った成果がこれか、と忌々しい気持ちで地図を眺める。

数年前に見つかったこの遺跡。

もともとは王族が暮らすための別邸として建築されたくかなりの広さがあるようだ。発見された時はほとんどが地中に埋まっていたため発掘作業に手間取り、まだ全貌がわかっていない。

そしてたまに、ここに入り込んだ遺跡荒らしの亡骸が発見されることもあるようだった。確かに、複雑な構造の上、地中に埋まったままになっている箇所もあり迷い易い。そのまま出られなくなって衰弱死、という輩が後を絶たないらしい。

かくいう俺も、遺跡荒らしと呼ばれる類だ。だが、何度もこいつた遺跡に入った経験があるし、出口がわからなくなるようなことはないという自信はあった。

まあ、なにしろ王族が住んでいた建物だ。調査団から、宝飾品が出てきたという報告もあるらしい。そのあたりの詳細はまだ一般人には明らかにされていないが、これだけ大きな遺跡ならまだまだお宝を発見できる可能性はある。そうなると早い者勝ちだ。

調査団と鉢合つと面倒だなと思っていたおり、ちょうど調査の中止に入るという情報を聞き、そのタイミングを狙って俺はこの遺跡に入り込んだのだ。

石造りの壁に沿ってさらに進み、角を曲がる。

……と、その先に何か動くものがあつた。

よく見ると、それは壁に背をもたせ掛けてうずくまっている一人の男だつた。顔は痩せこけ衰弱しきっているのがわかつた。かろうじて生きてはいるが、もうこいつは助からないと一目でわかる。

財宝を探しに来て、道に迷つたというところか。馬鹿な奴だ。何の準備もなく軽い気持ちで入つたのだろう。髪や目の色で異国の人間だろうということはわかつた。

声を掛けようかとも思つたが、水や食べ物に分けてやっても手遅れだ。この男はもうすぐ死ぬ。

このまま通り過ぎよう。そう決めて俺は足を速めた。

その時だつた。

男がゆっくりとした動作で俺の方を見る。目が合つた。そして、男は最期の力を出し切るように、何かを呟いた。明らかに俺に向かつて。

なんだ？

不明瞭だし、言語も違うのだろう。全く聞き取れなかつた。

気になつて少し近づいてみるが、もう男は目を閉じていて、自分の死を待っているだけのようだ。

だがなぜか、ひどく満足そうな顔に見えた。

言い知れぬ不気味なものを感じて、俺は小走りでその場から逃げ出した。

ずいぶん歩き回つた。方向を見失わなければ、ここから出られなくなることはない。俺だってそれなりに遺跡の歩き方は心得ている。食料や水もまだある。

何度も自分にそう言い聞かせて歩みを進める。
しかし、

「……なぜだ」

誰もいない遺跡の中に自分の声が吸い込まれていった。

おかしい。俺は確かに奥に向かって歩いていたはずなのに、出入り口付近に戻ってしまった。さつきもそうだった。だからと言って一旦遺跡から出ようとするといつのまにか奥へ繋がる道を歩いている。

妙に喉が渴く。

俺は、この遺跡に来る前に聞いた噂話を思い出していた。

……遺跡には呪いがかかっている。古代の王が無実の罪でここに幽閉されてそのまま最期を迎えた。数百年経った今でも、王の呪いでこの建物に入ったものは出られなくなる、というのだ。

調査の人間が何人も無事に出入りしているわけだから、呪いなんておとぎ話のようなものだろうが。

だが、そんな噂が出たのには理由があった。

遺跡発見の当初、数名の調査団が行方不明になるという事件があったのだ。遺跡の中で急に消えてしまったとしか思えない状況だったそうだ。結局別の調査団を結成して調査自体は特に問題なく続行された。しかし事件が忘れられかけた数カ月後、当初の調査団全員の遺体が見つかったのだ。遺跡の奥から。

衰弱死だったらしい。

結局は彼らが行方不明になった理由はわからなかった。準備を怠っていたわけでもないようだし、発掘調査に慣れている者もいた。

その調査員の一人がつけていた手記が見つかったそうだ。この遺跡に入ったのは彼らが最初のはずなのに、中にいた一人の老人に出くわしたと書かれていた。

遺跡が発見された当初に紛れ込んでいたのだろう。弱っている老人を助けようとしたが、不思議なことについてのか老人は消えてしまっていた。その後は、何故だか遺跡の出口にたどり着けなくなり、徐々に食料もなくなっていく……というような内容の手記だったそうだ。

調査団が出会った老人は昔この遺跡で死んだ王の亡霊なんじゃないかとか呪いの使者だったのだ、なんて一部のマスコミが書き立てたことで噂がひろまった。

どこまで脚色された話なのかはわからないが、まあ、こういう遺跡はなにが起るかわからない。

その後は調査団が行方不明になることはないようだったし、そんな事件や呪いの噂は気にもしていなかったのだが。

あれから何日経っただろうか。

俺にはもう動く力は残っていなかった。

俺は方向感を失ったわけではない。しかしどうやってもこの建物から出ることができなくなっていた。

何度も同じ道に戻るし、同じ行き止まりにぶち当たった。

途中、男に出会った場所にも戻ってみたのだが、もうどこにもその姿は見えなかった。場所を間違えていることはないはずだ。なのに、恐らくもう死んでいるであろう男の死体すら見当たらない。

呪い。

その言葉が頭をよぎる。

最初こそここから出ようと躍起になっていたが、もう無理なのだ。俺はこのまま、あの男のようにここで死ぬのだろう。

ふと、遠くから足音が聞こえてきた。

なんとか顔を上げて見る。二人組の男がこちらの様子を窺っていた。

調査のためにここに入った人間だろうか。

かわいそうに。

今の俺にはこいつらの行く末が手に取るようにわかる。

噂に聞いた最初の調査団もこの呪いのために出られなくなったのだ。

もちろん俺が出会った男も。

そして俺も。

皆、呪いを伝えていくための一駒に過ぎないのだ。

大きく二コースで取り上げられた調査団の遺体が見つかった事件後も、ほぼ定期的に遺跡荒らしなどの誰かしらの死体が見つかったはずだ。

……二人組は俺の方に近づいてきた。様子を見ようとしているのだろう。

今となつてはあの時に男が俺に向かって言った言葉を理解することができた。

俺は二人組に向かって言葉を投げかけた。

「出られませんよ」

それは彼らに通じただろうか。通じていなくても構わない。

古代の呪いを絶やさずに済んで、肩の荷が下りた気分だ。

俺は満足感を覚えて、静かに目を閉じた。

私、愛されています

まさかね。

何度も頭の中でそう繰り返す。

何にも不安になることなんてない。この人はこんなにも温かく私を支えてくれてるじゃない。

今は悲しみが強くてちよつと変なことを考えてしまうだけ。

大丈夫。そんなはずはない。

「咲子、また思いつめてるんじゃないだろうな？ 何度も言うようだけど君は悪くないんだよ？ 自分を責めたりしたらダメだからね」

あなたにそう声を掛けられてハツと私は顔を上げた。やさしい私の夫。にこりと微笑むあなたと目が合う。

カフェオレを淹れてきてくれたようだ。

「ありがとう」

お礼を言つて、カップを受け取る。カップの暖かさに少しだけほつとした。

あなたもそのまま向かいのソファに腰掛けたけど、その穏やかな瞳から、私はなんとなく目を逸らしてしまう。

「智樹が死んだのは事故だったんだ。誰も悪くない」

私を見て、諭すようにそう言ってくれるあなたの顔を、やはりちやんと見れなかった。

智樹。

私たちの子どもの名前。生後一年も経っていなかった。あの子の命が絶たれてしまったのは、私のせいだと何度も何度も後悔している。

そんな私の心を見透かすように、あなたはいつも私のそばにいる。確かに事故だったのかもしれない。

部屋の中を動き回って何でも口に入れる年頃だった智樹。いつでも様子を見れるように近くにいたし、口に入れてしまいそうな物が無いよう掃除にだって気を使っていたのよ。

それなのに。

ちよつと目を離れた隙にぐったりとしていた智樹に慌てて近寄って様子を見ると、誤ってマニキュアを飲んでしまったようだ。ふたが開いたマニキュアの入れ物を小さい手に握っていた。赤い色の液体に興味をそそられて飲んでしまったんだと思うわ。

しばらく前から化粧品入れの中に見当たらず探していた物。急いで病院に連れて行っただけ、そのまま智樹が目覚ますことはなかった。

乳幼児にはマニキュアなどの化粧品は毒性が強いということは知っていた。だからこそ智樹の行動範囲にそういうものが間違っ落ちていないように気を配っていたのに。

「……わかってるわ。でも、私がもっと気を付けていたら防げたかもしれないもの」

今さら仕方のないことだってわかってはいても繰り返すその事を思ってしまう。

「咲子。あの赤いマニキュアは家具の隙間に落ちてしまっていたんだろ？ 見つけれなくても仕方がない場所だったんだよ。たまたま智樹が見つけただけで」

……………。

あなたは一切私を責めなかった。

今まで一度も私を責めることなんてなかったかもしれない。

そういえば、と以前飼っていた犬のクロのことを思い出す。

人懐っこい犬で、私もあなたもとても可愛がっていたわよね。

あなたの帰りが遅い日が続く時なんかは、「私にはクロがいるから別に寂しくないわよ。私の一番はあなたじゃなくてクロね」なん

て冗談交じりにちよつとした嫌味を言ったりもしていた。

あなたは笑顔で、「ひどいなあ。じゃあ、僕は二番目かな？」とかよく言ってたのよね。

そのクロが私の不注意で死んでしまった時も、私は責められなかった。

私がきちんと庭に繋いでおかなかったから、夜中に抜け出してしまったようで、翌朝にクロがいないことに気付いた。私と一緒にあなたも探してくれて、交番にもついてきてくれた。動揺してる私に代わって、「黒い子犬で、首輪は鮮やかなオレンジ色です。犬種は……」って、的確に説明してくれてた。よく覚えてる。

数日後に、川に落ちて溺れたらしい犬の死体が川下に流れ着いたって、警察の人が連絡くれて、確認に行ったらやっぱりクロだった。見つかっただけでも幸運だったと言われたけれど、もちろん私もあなたもショックを受けた。

「クロが死んでしまったのは辛いけど、君のせいじゃない」
やはり自分のせいだと落ち込んでいる私に、あなたはそんな風に声を掛けてくれた。

あなたは、いつも私を支えてくれているのよね。

「咲子。辛い時にはいつでも僕を頼ってくれればいいからね」

カフェオレを一口飲んで、カップをテーブルに置いたタイミングを見計らうかのように、あなたが言った。

それに対して私は笑顔を返す。

うまく笑えたかしら。不自然な笑顔になってない？

ねえ、あなた。

私、智樹が間違つて飲んだマニキュアの色が「赤い」色だったなんて一言も、あなたに言っていないのよ。どうして知ってたのかしら？ 床にはこぼれてなかったし、病院に連れて行った時に智樹はマニキュアを握りしめたままだったから病院のごみ箱に捨てたの。あ

なたが見る機会はなかったはずよ。

それにね、私、整理整頓が苦手だってあなたも知ってると思うけど、化粧品だけはきちんと整頓してるのよ。

あなたが持ち出して、私が気付かないように、智樹の目に付くように、それを置いたんじゃないかって……。

まさかね。

『私、今はあなたよりも智樹の方が大事かも。智樹のこと世界で一番愛してるわ』

少し前にそんな風に言ったことがあるけれど、やっぱりあなたは笑顔で「子どもには敵わないなあ」なんて言ってたわよね。

そうね。あの時、病院に駆けつけてくれたもんね。その時に病院の先生と話したりしてたから、色のこともたまたま話に出たのかもしれないしね。

でもね、クロのこと。

泳ぎが得意だったクロが溺れるなんて、変だなあ、って思ったの。流れの緩やかな川だったし。誰かがいたずらで、クロの事を橋の上とかから川の真中に突き落としたんじゃないかって、嫌な想像ばかりしちゃったわ。

それは今となってはもう確認のしようもないけど……。

ねえ、あなた。

どうしてクロの首輪がオレンジ色だったって知ってたの？

あれ、クロがいなくなった日のお昼に衝動買いしちゃったのよ。

ピンクっぽい色だった首輪が汚れてきてたから。買った首輪を早速付けてあげたの。

あの日、あなたの帰りが遅かったからその事言いそびれちゃって。そして、次の日の朝にはクロがいなくなっただから新しい首輪を見ることはなかったはずよね。

うつん。でも、あなたがあの日遅く帰った時、家に入る前に庭に

いるクロの首輪を見たのかもしれない。外は暗いけど、犬小屋のあったあたり、ちょうど街灯の光が当たるから、目立つオレンジ色は判別できたのかもしれないもの。

あなたがクロを連れ出して、川に突き落とすまでの間に間近で首輪を見たから色が印象に残っていた……、なんて、考えすぎよね。

「僕はいつでも君のそばにいるからね」

穏やかな夫の言葉。

まさかね。

何度も何度も頭の中でそう繰り返す。

そうだ。そんなことあるはずないわ。

何にも不安になることなんてない。この人はこんなにも温かく私を支えてくれるじゃない。

今は悲しみが強くてちょっと変なことを考えてしまっただけ……よね。

そんなはずはない、わよね？

誰もいない

『イシスはかなり育ってきた。

肉眼では見えないサイズから、こぶし大にまで大きくなったのだ。ここまでの苦勞を思うと、感慨深いものがある。』

……読み進めていた日記から目を離し、一旦休憩しようかと、ゆっくり深呼吸する。

この研究所内に残されている記録という記録を読みあさってさすがに疲れた。

ページをめくる自分の指もなんだかいつもより弱々しく見えて、こんなところにも疲れが出るのだろうか、なんて可笑しくなった。今は一人の研究者の日記を読みはじめたところだ。科学的な検証が書かれたレポートを読むよりは楽な作業だが。

……ここの研究員達は、問題の生物をイシスと名付けそう呼んでいた。

『イシスの目が少し開いた。光を感じることができるようだ。

今まで散々失敗を重ねてやっとここまでたどり着いたんだ。このまま育ってくれば良いのだが。』

研究所には十数人の研究員がおり、ここで寝泊まりしていた。

森の中の建物は一見ホテルのようにも見えるが、かなり高度なセ

キュリティを備えた施設である。

それもそのはず。国家機密の研究が行われているのだから。広さだけでいうと大した規模ではないのに、注ぎ込まれている研究費は巨額なものだと聞いたことがある。

『今日はイシスを初めて培養液から出す日だ。

人間の子供のサイズにまで育ったイシス。精密な検査を行った上でのことだが、空気に触れた状態でも生き続けることはできるだろうか？』

毎日本部に届いていた経過報告が突然こなくなった。何かトラブルがあったのかと本部からも連絡を試みたようだが、応答がない。

何日かは通信機器の故障かもしれないと様子を見ていたようだが、まさにぼつり、という感じで研究所からSOSの信号が届いた。そして、この人里離れた研究所に派遣されたのが、俺達というわけだ。

『イシスの成長は目覚ましいものがある。

数日前に、培養液から出すのをあんなに心配していたのが馬鹿々々しいくらいだ。

今では研究所内の決められた範囲を自由に歩き回っているし、言葉も話せるようになってきた。

かすかだが人間と同じように表情だってある。

ちなみに、手の指がひよろつと細めで、力はあるのだが細かい作業が苦手なようだった。

もちろん急変を起こさないと限らない。油断はできないが、今のところはすべてが順調だ。」

俺達が研究所にたどり着いた時、思ったより簡単に内部に入れた。本来なら何重にもロックされて外部からは簡単に入れないようにしてあるはずなのだが、それが全て解除されていたのだ。

原因を探るべく残されていた記録などを手分けして確認していたのだが、すべての記録がある日を境に途切れているのだ。

『有り得ない事が目の前で起こった。

同僚のマイクとともに研究室に向かって廊下を歩いていると、イシスがぼつんと廊下の奥に立っているのが目に入った。普段は必ず研究員の誰かが付き添っているはずなのに。

イシスはゆっくりとこちらに近づいてきたが、何か違和感がある。

「こんなところで何をしてるんだ？」

私はイシスに問い掛けた。ある程度の会話はできるはずなのだが、イシスは答えない。

そしてイシスは、マイクの方に近づいていった。」

俺達が研究所内を調べた時には、誰ひとり見当たらなかった。

未知の生物を育てている研究所だ。そいつが暴走して大惨事に…

…なんてことも想定していたのだが、研究所内で争ったりした形跡は一切なかった。

『イシスは、無言のままマイクの肩に手をかける。
見慣れた姿なのになんだか化け物のように見えた。

「おなかすいた」

イシスがそう呟いた気がしたその時、

一瞬のことだった。

マイクがイシスの手の平の中に吸い込まれたのだ。

……そうとしか表現の仕様がない。

マイクはいなくなっていた。いた痕跡すら残っていない。イシスに
吸収された……。

食べられた、のだ。

イシスは、こちらを見た。

しんと静まり返った研究所の廊下。この時間に人がいないなんて明
らかにおかしい。

皆、マイクと同じように食べられたのだろうか。

私はその場から動けなかった。

イシスは、目の前までやってきた。

そして私にこう言った。

「どうしたんだ？　こんなところに突っ立って」と。

声こそイシスのものだがしゃべり方が違う。まるでマイクのような
口調だった。

まさかとは思ったが、私は声をかけてみた。

「マイク。私は忘れ物をしたから一旦部屋に戻るよ。先に研究室に
行ってくれないか？」

一瞬の間があった。

「わかった」

あっさりと承諾して、イシスは研究室の方へと歩いて行っただのだ。』

そういえば、俺と一緒に研究所に来た奴らはどこに行ったんだろ
う？

しばらく前から姿が見えない気がする。単独行動は禁止されてる
はずなのに。

『私は、必死で研究所内を駆けずり回った。

ひとまずここから出る術^{すべ}を探した。しかしどの出入口も完全にロツ
クされている。本来なら所定のピンナンバーで中から開けることは
可能なのだがそれもできない。

他の研究員に会うこともできなかった。

皆、イシスに食べられたのか身を隠しているだけなのかはわからな
いが。

いずれにしても、研究所は完全に機能を停止してしまった。

私の推測だが、イシスは食べた人間の能力を取り込むことができる
のだろう。セキュリティを担当していたアイラスのスキルを使つて
外部への連絡もすべて断つてしまったのだと思う。私もある程度の
知識はあるつもりだが、システムを復旧させることはできそうにな
かった。』

俺は日記を読みながら背筋が寒くなった。

ここに書かれていることが本当ならば、この日記を書いた本人も
もう「食べられて」しまったのだろうか？

俺達は研究所の隅々まで探したはずだ。

イシスが、もしここを出て町へ向かったりしたら大変なことにな
る。

『やはり、ここにはイシスと私しかないようだ。

イシスはマイクとして生活し、私と話したりもする。そんな異常な状態がいつまでも続くわけがない。

イシスは、取り込んだマイクの記憶や人格をそのまま残している。

マイクは、まわりに他の研究員やイシスが見当たらないことに違和感を感じながらもそれを深く考えることができないようだった。

自分が食べられたことに気付いていない。

人差し指を怪我した時は、「これ、アイラスにもらったんだ」なんて言いながら、キャラクターの絵のついたかわいいバンソウコウを貼っていた。

以前、誰かが切り傷を作ってしまった時にもアイラスは彼の子どもにもらったというそのバンソウコウを、少し照れながら渡していたのを見かけたことがある。

マイクはマイクとしていつも通りのことをしているだけのようだった。

それならばと、なんとかうまく話をつけて研究所から脱出しようと試みているのだが、イシスには隙がない』

ページをめくる手に力が入ってきて、俺は無意識にめくるのを別の手に変えた。

その時、俺の人差し指にカラフルなバンソウコウが貼ってあるのが目に入った。

あれ？

俺はいつこんなとこ怪我したんだった？

…… まあいい。今はそれどころじゃないからな。

「イシスは、本部にSOS信号を出したと私に告げた。建物から出れないし、食料もなくなってきたから、とマイクの言葉で言った。しかし私は知っている。食料庫にはまだ十分な食べ物があることを。マイクを取り込んだ時以来何も口にしていないことを。食料とはつまり私のことだということを。」

SOSを受けて本部からは当然人が派遣されてくるだろう。外部と連絡をすることがあれば、マイクとして対応した方がスムーズに話が進む。

きつと、今後新たに食べた人間の方が有益だと思えば、その人間の記憶の方を残すんじゃないだろうか。

なんとか次の被害を食い止められればいいが、私にはもう打つ手がないようだ。」

日記はここで終わっていた。

本人がいらないということはここに書かれている通りに食べられてしまったのだろうか。

……ところで、お腹がすいてきたな。

現状を知らせるためにも本部に増援を頼むべきだろう。

今回来た俺達よりも大人数が来るに違いない。

そうなれば、当分は食料に困らないだろうな……。

雨が降る

まとわりつくような雨が鬱陶しい。

嫌な雨だ。

私はゆつくりと雨の中を歩いていた。

大通りを外れ、大人が譲り合ってようやくすれ違ふことができるくらいの狭い道を進んで行く。

濡れた石畳に足を取られないよう気をつけながら何度か角を曲がった突き当たりにもその建物が見えた。

赤い煉瓦の寂れた建物。どうということのない外観の孤児院。

年期が入ったドアノックカーを鳴らすとすぐに応答があった。中から若い修道女が顔を出す。

「面会の予約をしていた医師のドーソンですが」

「ええ。どうぞ」

面会の話は事前に聞いていたのか修道女はすぐに招き入れてくれた。コートに付いた雨粒を軽く払い、私は孤児院の中に入っていく。中に入ると子ども達が思い思いに過ごしている。様々な年齢の子ども達が何人かで集まって遊んでいたりするのだが、その中の赤毛の女の子が私に声をかけてきた。

「おじさん、また来たの？」

あどけない表情で尋ねてくる。誰かと勘違いしているようだ。きつと年輩の人間なんて格好が似通っていて、この小さな女の子には区別がつかないのだろう。

「いや。おじさんはここに来たのははじめてだよ」

邪険にするのも悪いかと思い、軽く言葉を返した。

修道女はその様子を少し前で立ち止まって眺めていたようだが、私と目が合うと奥に向かって足を進める。私も女の子にバイバイと手を振って彼女の後に続いた。

「キースのことなんです。彼はどんな少年なんでしょう？」

修道女の後ろ姿に向かつて尋ねる。少しだけ、歩みが遅くなった。キース、というのが私が会いに行こうとしている少年だ。彼には不安定なところがあるらしく、一度会って話をして欲しい、と友人から頼まれた。つまりは精神的に異常ではないか診断してほしいということだと理解している。私の専門ではないが、まあ、手に負えないようなら専門の医師を紹介すればよいだろう。

「わたしはキースとは話したことがないので……」

振り向きもせずに修道女は答えた。

話したことがない？ まさかキースは会話すらまともにできないような状態なのだろうか？

廊下を通り過ぎると小さな塔にたどり着く。そして狭い螺旋階段を上り、案内されたのは一番奥にあるドアの前。隔離されている、という印象が拭えない。

修道女はそのドアをノックした。

一瞬だけ、間があったと思う。中から聞こえてきたのはしっかりとした声だった。

「はい。どうぞ」

声に反応したのか、修道女は私に中に入るのを促すようにドアを開けた。

事前に写真などを見る機会はなかったので、はじめて彼の容姿を見ることになるが、そこにいたのは金髪碧眼の少年だった。身なりはきちんと整えられている。

修道女は「お帰りの際には声をかけてください」と言うと、さっさと引き返していつてしまった。

「やあ。今日は君に話を聞きにきたんだ」

高圧的にならないように笑顔を浮かべながら言った。

「はい」

落ち着いた物腰で頷く少年を見て拍子抜けした。ひとまず会話をするのに支障はないようだ。部屋の椅子に座って話し始める。

「君は、私のことは誰かから聞いているかな？ 私は町医者をして

いるんだが、君に元気がないから会って話を聞いて欲しいと頼まれたんだよ。最近、調子はどうかな？」

笑顔を保ったままそう問いかける。

少年は私に向き合うつと、ふ、と笑った。
なんだ？

「本当はね、僕があなたをここに呼んだんですよ」

「それは、どういう……？」

「こんな雨の日って誰かと話したくなるんですよね。僕が事故に遭った日のことか」

「……事故に遭ったのかい？」

そんなことは事前に聞いていない。

「この孤児院の前で車に撥ねられたんです」

言いながら、少年は立ち上がって窓に近寄り少しだけ開いていた戸を閉める。

「雨が激しくなってきましたね」

外を見ると叩きつけるような雨が降っていた。窓からは私が通ってきた狭い石畳の道が見える。遠くの方は雨で霞んで、まるで帰り道がなくなってしまったかのようだ。

私は少年がまた椅子に腰掛けるのを待った。

「こんな、冷たい雨の日でしたよ」

さつきも雨の日には誰かと話したくなると言っていたが、私が来た今日がたまたま雨だったというだけだ。

孤児院のまわりは先程私が歩いてきたような狭い道が多いのだが、裏庭に面した道は幅が広く、結構な速度で車が通ることもある。

「事故に遭ったのはいつ頃のことかな？」

「もうかなり前です」

確かに、キースには特に怪我の痕などは見あたらない。

「その事故のことが忘れられないのかい？」

事故に遭ったショックが大きくて、精神的に不安定な状態におかれているのかもしれない。

「……そうですね。あの時のことはよく覚えてます。僕を撥ねたのは町長の乗った車でした」

「なんだって？」

「運転していたのは運転手でしたけど。でも子供を撥ねたなんて知られたら町長を続けられなくなると思ったんでしょね。手を回して事故をなかったことにしてしまったんです。酷いでしょう」

私は返事に窮した。

本当だろうか？ 実は私は町長とは旧知の仲だ。

キースが嘘をついているようにには見えないが、人に注目されたくてそんなことを言っている可能性もある。

慎重に対応しておいた方がいいだろう。

「そうだね。君はどう思っているんだい？」

どうとでもとれる質問に対してキース少年は私が聞きたい答えを返してくれた。

「僕は、もう今更そのことを誰かに伝えて大^{おお}事にするつもりはないですよ。ただ、僕のこと忘れ去られてしまうのが嫌なだけです」

なるほど。事故の真偽はわからないがやはりキースの言動は人に構ってもらいたいというところからきているのだろう。

一度事故のことも調べてみた方がいいな。

私は腕時計をちらつと見て、そろそろ帰ることにする。

キースは一通り事故のことを話すと満足したのか、後は他愛ない話をして時間を過ごしたのだった。

私はキースに別れを告げて、部屋を後にする。

来るときに通った廊下を逆に歩き玄関ホールに入ると、ちょうど最初に私を案内してくれた修道女がそこにいた。

帰る時は一声掛けるように言われていたな。

そう思って彼女にお礼も兼ねてあいさつをする。

「さつきはありがとう。ところで、もう少し色々キースと話をし

たいので、日を改めてお伺いしますよ」

私がそういうと、修道女は曖昧な表情を私に向ける。

「そうですか……」

言いながら玄関まで私を見送りに出てくれた。雨がひどければ傘を借りようかとも思ったが、小降りになっている。

私はそのまま雨の中に足を踏み出したのだった。

狭い石畳の道を歩き、私は雨の中、孤児院へと足を進める。

手慣れた様子で修道女が迎え入れてくれ、私はキース少年に会うことができた。

キースは落ち着いた物腰で、会話に支障はないようだ。精神的に不安定で話もできなかったら困るな、と思っていたのだが。

挨拶の後、彼が話したのは自分が町長の車に撥ねられたという事故のことだった。

人の気を惹きたいのだろうと思い、しばらくその話につき合う。思った通り、一通り私に話をする落ち着いたよう形で、後は他愛ない話をして過ごし、時間をみて私は帰ることにした。

しかし、事故のことも調べてキースに会いに来た方がいいだろうな。そんな風に思いながら私は来た道に戻って玄関に向かう。帰る前に修道女に声をかけておこう。

きよろきよろと辺りを見回していると、子ども達の話し声が聞こえてきた。

「今日もあの人達来てたわね」

「うん。雨の降る日にはいつも来てるよね」

「ええ。奥の塔の方へ行つて、しばらくしたら帰って行くのよね」

「塔には誰も住んでいないし、ボク達は立ち入り禁止って言われているのに」

「そうよね。何しに来てるのかしら？」

一人は年長の赤髪の女の子。もう一人は幼い男の子だ。彼女らが話しているのを聞いて、それが私のことだろうかと思ひ当たるのに少し時間がかかった。いや『あの人達』と指していたので一人でここに来た私のことではないかもしれないが。

その子達は私がここにいることに気付いていないようだ。

声を掛けて聞いてみようかと思ったその時、後ろから呼び止められた。

「ドーソンさん、お帰りですか」

先程の修道女だ。

「はい。しかし、もう少し色々ときー」と話をしたいので、日を改めてお伺いしますよ」

子ども達の方が気になったが、とりあえず私は修道女にそのように告げた。それに対して彼女は少し微妙な顔をしたが、すぐに無表情に戻った。

「そうですか」

「ええ」

「でもね、キースはもう存在していないんですよ。この孤児院にいたのは十年以上も前。ある日突然姿を消してしまったんです。不自然なくらい突然に」

なんのことだか一瞬理解できなかった。彼女は何を言い始めたんだ？

「でも人の口に戸は立てられないもので、後々、キースは車に撥ねられて死んでしまったことが噂になりました。その車には当時の町長が乗っていたことも。キースが死んだこと自体を事件ごと一切無かったことにしてしまったんでしょうね」

キースも町長に撥ねられたということは言っていた。しかし、死んだとはどういうことだ？ 私はさっきまでキースに会っていたというのに。

「しばらくして、キースを訪ねて雨の日にやってくる人たちが現れました。誰も住んでいないあの塔に。理由はそれぞれですが、友人

や親戚に頼まれてキースに会いに来たと。その顔ぶれがね、町長をはじめ彼の運転手や警察官、この孤児院の以前の院長、そして医者様。……それだけの人間が集まれば孤児ひとり进行なかつたことにするのでも可能だつたでしょうね」

「え？」

「ドーソンさん。私やこの孤児院にいるみんなにはキースのこと見えないんですよ」

「ちよつと待つてください。見えないつてどういうことですか？」

部屋まで案内してくれたのは彼女ではないか。

「キースがいなくなつてからすぐに彼らは行方不明になりました。そして雨が降る日はこの孤児院を訪れます。ここの院長だつた人ですら、まるで初めてここに来たとしてもいうように。それに彼ら……いえ、あなた達は年を取りません。時間が進んでいないんです。もちろんキースも、ずっと少年のままのようですよ」

まさか。

私をからかおうとしているのだろうか。

頭の奥がジンジンする。

修道女が一步前に入る度、私は後ずさるようになかたちで扉に近づいて行く。

「私は、ここに来たのは今日が初めてなんですよ！？」

私のことをじつと彼女はみつめる。

「いつもわたしがあなたをキースの部屋まで案内しているんですよ。何度あなたはここに来たかしら？」

この人は何を言っているんだ？

「あなたはキースの失踪に手を貸してしまつた。わたしにはわかりませんが、きつと不思議な空間に捕らわれてしまつていらっしゃるんですよ。他の方達と同じように」

私はいつの間にか孤児院の外に追いやられていた。

「わたしがこんな事を言つたことも、次に来た時には覚えておられないんですわ。何もできないわたしのちよつとした罪の告白です。」

何のお役にも立てなくてごめんなさいね」

何を言って……

「気をつけてお帰りください」

彼女の、その言葉を最後に私の目の前で扉が閉められた。

私は孤児院に向かって雨の中、細い石畳の道を……

父からの

表に僕の名前だけが書かれた茶封筒が郵便受けに入っていたのはつい先日のことだ。差出人は書いていない。

不思議な事に気味悪いとは思わなかった。なんのためらいもなくその封筒を開けると、中から出てきたのが古ぼけたビデオテープ。父の部屋にあったこれまた古ぼけたビデオデッキを引っ張り出してそれを見た僕はある人物に連絡を取った。

そして今日、その人物と会うことができたのだ。

昔、父が行方不明になったこの洋館で。

父が行方不明になったのは僕が小学生の頃。もう十年ほど前だ。郊外の洋館に泊まりに行った父は、持って行った荷物ごとになくなった。

その洋館はもうすぐ取り壊しが始まる予定で、作業のために電気を一時的に復旧させてある。ここに来るのも今日が最後だろう。館の中は別荘として手入れをする前に使われなくなったので、家具などは少ない。

室内にあるテレビとビデオデッキは埃をかぶっていたが、使えるようだった。もし動かなければ仕方がないと思っていたのだけれど。僕は埃を払うと、持ってきたビデオテープを差し込んだ。

窓の光を遮るためにカーテンを引く。埃が舞って、すえた匂いが鼻をつき僕は顔をしかめた。室内が薄暗くなる。

僕は振り向くと、部屋の中にいるもう一人に目を遣った。

「じゃあ、再生しますね」

声を掛けると、その人物はこくりと頷く。

それを見て僕は再生ボタンを押した。

ウィーンと鈍い音が響き、荒い画像が映し出された。

「すごいなあ、この洋館」

長髪の男性、津山さんが部屋の中を見回しながらそんな風に言うところから映像が始まっていた。

映っているのは今まさに僕達がいるこの部屋の中だ。

「熊代君が親戚のつてで管理を任された洋館なのよね？」

「うん。とは言っても周りにはコンビ二もスーパーもない不便な場所だし、管理会社の人に任せっぱなしなんだけどね」

黒髪の釈さんという女性の質問に対して、頭を掻きながら答えるのは僕の父だ。

「ちゃんと電気や水道は使えるんだろうな？　ぼ、僕達が滞在中に止まったりしないだろうね？」

と、神経質そうに質問をしたのは山王寺さん。

「あんたって、相変わらず失礼ね」。せっかく熊代君がこの洋館に泊めてくれるっていうのにそんな言い方ないでしょう」

今度はパーマをかけた茶髪の女性がたしなめる。彼女は飛鳥さんだ。

ビデオに写っているのはこの五人。大学時代、旅行サークルのメンバーだったそうだ。

ビデオの中の飛鳥さんが言う。

「でもさあ、サークルの同窓会で五人ともそろってまた旅行に来れるなんてすくくない？」

「みんなもうおじさんおばさんになっちゃったけどな」

津山さんのその言葉にみんな少し笑った。

「熊代君って息子さんいたわよね？　小学生だった？　こついうとこ連れてきたら喜ぶんじゃない？」

落ち着いた声で問うのは釈さん。

僕のことだ、とビデオを見るたびになんとなくドキリとする。

「うん。そうなんだ。夏休みに連れてくるつもりなんだよ。周りに自然も豊富だしね。……そうだ。部屋に荷物を置いたら皆で外に出てみないか？」

そんな風に父が提案したところでビデオは一旦途切れる。

今、僕と一緒にビデオを見ているこの人は映っている自分自身の姿を見てどう思っているんだろう。

動くこともなく画面を見つめている姿からは何を思っているのかわからない。

僕はその人物が腰掛けているソファから少し離れたところに立って眺めていた。多分、ビデオはこの辺りから撮られたものだろう。がらんとした空きスペースになっており、恐らく後で家具でも置く予定だったのではないかと思う。壁からも離れているので寄りかかるところもないのだが、ビデオが終わるまでは室内を見渡せるこの位置にいるつもりだ。

一瞬だけ画面に砂嵐が混じり、また映像がはじまった。

映像の中は夜になっている。

部屋の間かりは薄暗く、画像は悪い。音声も不明瞭だが、父以外の四人がそこにいるのはわかる。

「熊代は、み、見つかったのか？」

不安げな山王寺さんの声。その質問に対して残りの三人は顔を見合わせてから答え始める。

「私と釈ちゃんは一階と二階の全部の部屋を見て回ったけど見つからなかったわよ。熊代君の部屋もちろん誰もいなかったし」

大袈裟な身振りをつけて飛鳥さんが言った。その言葉に釈さんも同意する。

「一応、大きなクローゼットとか人が隠れることができそうなスペースも覗いてみたんだけど」

言いながら、彼女は首を横に振る。

「ま、まさかそんなところにはいないだろ？ 散々呼びかけてるんだ。し、死体にでもなつて押し込められてたりしてない限り、そんな不自然なとこにいるわけないよ」

言つて乾いた声で笑う山王寺さん。彼なりの冗談だったようだが、他の誰も笑わなかった。

「いや。熊代は人を驚かすのが好きだったからな。どこかに隠れてるうちに眠っちまったってこともあるかもしれない。もしかしたら俺達がこつやつて探してるのを見て楽しんでるかもしれないぞ」

津山さんが明るいい声を出す。場の雰囲気や和ませようとしたのだろう。だが、釈さんはそれをやんわりと遮った。

「でも、熊代君は人を心配させるようなことはしないと思うわ」

「そうよね。もしかして散歩中に怪我でもして戻つて来れなくなつてたりして。あんた達、外を探してきたんでしょ？」

「ど、道路の方にはいなかったよ。車も僕達がここに到着してから動かされてないみたいだしね。つ、津山はどうだったんだよ？」

皆の視線が津山さんに集まる。

「ああ。昼間に皆で裏の崖を見に行つたら？ そつちを探してみたんだけどなんにも見つかなかつた。なくなった荷物が岩場に引つかかつてるってこともなかったしさ」

「でもあの崖、切り立つてて下の海も波が高かつたし……。まさか足を滑らせて落ちたなんてことないわよね？」

釈さんのその言葉に、部屋の中はしんと静まり返つた。各々がその可能性を考えているのだろうか。

父がいなくなり捜索願いを出した際、警察が出した結論は「海に落ち、沖に流された可能性が高い」だった。人里離れたこの洋館か

ら車を使わずに理由もなく歩いて町に向かったとは考え難い。荷物を持ったままいなくなったことは多少不審に思われたが、崖の足場が崩れた形跡もあったそうだ。自殺したのではないかという話まで持ち上がり、結局うやむやのままに年月だけが過ぎた。

「まさか。俺、崖の下ものぞきこんでみたけどさ。落ちたんならなんか証拠があつてもよさそうだろう？」

「そうよねっ！ もつかい皆で探してみましょ」

「ええ。さっきは熊代君の部屋も軽く覗いただけだったし、何かなくなつてゐる物とか置き手紙みたいなものがないか確認してみた方がいいわね」

「そ、そうだな。み、皆で回ればさっき見落としたことも発見できるかもしれないしな」

どこから探そうかと言い合いながら部屋を出て行く四人。その後ろ姿を映し出したところでビデオは終わっていた。

たったそれだけの映像。

父の姿をビデオの中だけでも見れたことは嬉しかったが、最初は意味のない映像だとは思わなかった。しかし何度か見るうちに気付いた。

「あなたは父が行方不明になった理由を知っているんじゃないですか？」

僕は静かに語りかける。

ビデオが終わってもじつと画面を見つめている人物に。

「……なぜ？」

彼の発した言葉は少し掠れていた。

「父が行方不明になった時、荷物も一緒になくなっていました。でも、父を探しているこの時点で皆はそれを知らなかった」

彼、……津山さんは黙っている。

「あなたはこのビデオの中で、父の荷物がなくなっている事を知っていた。……僕も母も未だに父が帰ってくるんじゃないかと思っ待っているんです。無駄だとわかっていても。でも、そろそろ気持ちにけじめをつけないけません。そのつもりで、ずっと手がかりになるかもしれないと思っ置いていたこの洋館も取り壊す事にしました。……教えてくれませんか、何があつたのか」

僕は津山さんから目を逸らさずに言った。

「……あの日、夕飯前に散歩でもするかって二人で外に出たんだ。……俺がふざけて崖の近くで君のお父さんを押してしまつて。もちろん軽く押しただけで崖から落とそうだなって考えていなかった。なのに、急に足場が崩れて……」

津山さんはポツリポツリと話す。

「もちろんすぐに助けを呼ぼうとしたよ。でも……崖の下にはもう何も見えなくて……怖くなった。俺がわざと殺したと思われたくない一心で熊代が部屋に置いていた荷物も崖から捨てたんだ。自分から姿を消したように見えるだろうと思つて。俺はどうかしてたんだ」
そう語る津山さんの顔には後悔の色が浮かんでいた。きっとこの人もずっと苦しんできたんだろう。そう、思う。

怒りみたいな感情は湧いてこなかった。やはり父は死んでしまつたんだな、とただそう思つた。

「そうですか。話してくれてありがとうございます」

はじめて津山さんと目が合った。

父がいなくなった時から、僕の回りの時間はとてもゆっくりしか進んでいかない気がしていた。この人の時間も止まっていたのだろうか？

そんな風に思つた時に、急にビデオの方からキュルキュルという耳障りな音が聞こえてきた。

画面には何も映っていなかったが再生をしたままだったことを思い出す。

津山さんがビデオデッキに駆け寄つて慌てて取り出したテープは、

奥に絡まってしまったようでテープがぐちゃぐちゃになってはみ出していた。

「これ、ダメだな。もう見れないかもしれないよ」

困ったような顔で僕にそれを見せる津山さん。

残念だけど老朽化していたのだろう。仕方がない。それに……

「僕、そのビデオを見ただけでよかったと思ってるんです。あの……。これを届けてくれたのは津山さんじゃないんですか？」

ビデオが届いてからずっと考えていたのだ。誰が、これを郵便受けに入れたのか。

これを見れば犯人がわかることを知っていた人物。となると、津山さんしかない。

しかし、意外にも彼は首を横に振った。

「違うんですか？」

他に思い当たる人なんていない。でも、津山さんが嘘をついているとも思えなかった。

すると、彼は僕がいる辺りを指差した。

なんだろう？

僕はつられて周りを見るが何もない空間が広がっているだけだ。

僕が困惑しているのがわかったのか、津山さんは口を開いた。

「このビデオ。君が立ってる辺りから撮られたものだ」

確かに。それは僕も思っていたことだ。

「結構近くから撮られてるのに誰もカメラの事を気にしていないと思わなかったか？」

続けて津山さんが言う。僕は素直にうなずいた。

多分、誤って録画状態になっていたのを気付かずこんな映像が撮られたんだろうと解釈していたんだけど。

「俺達がここに来た時と全く変ってないんだ。この部屋。つまりはその場所にカメラを置く台なんてない。床に置いて撮られたものではないしな」

津山さんはテープが伸びてしまったビデオを残念そうに撫でなが

ら半分は独り言のように言う。

僕はただ、言葉の続きを待った。

「あの日、ビデオカメラをもって来ていたのは熊代だけだった。ここに着いた時に、新しく買ったんだって嬉しそうに見せびらかしてたよ。今度息子を撮りたいから今日は試し撮りをするってね」

え？

「でも、さっきも言った通り俺は熊代の荷物をすべてあの時捨ててしまったんだ。ビデオカメラも中に入っていたテープも一緒にね」

「じゃあ……」

「これはあるはずのないビデオだったんだよ」

僕の目を見据えてそう言った津山さん。

「これのお蔭で前に進めそうな気がするよ。罪は償わなくてはな」
父がいなくなった理由がこの人にあるのだから、僕はこの人を恨んでもいいはずなのに。……何故だかそんな気にはならなかった。

「僕も。前に進みたいと思います」

不意に、いたずらが成功した時に嬉しそうに笑っていた父の顔を思い出した。

隣の人は…

一人暮らし用の1Kのアパート。

「木下さん！ 中にいるんですか！？ 警察の者です！ ドアを開けてください！」

玄関からは、鍵のかかっているドアをガンガンと叩く音が聞こえてくる。

おそらく、ガラスが割れる音を聞いて近所の人が通報したのだろう。

俺の横には人が倒れている。

いや。死体がそこに転がっていると言った方が正確だろうか。その胸には包丁が刺さっており、それには俺の指紋がついていることだろう。

そして、この部屋の持ち主の「木下」は俺のことじゃない。事の始まりは、俺の部屋に響くインターホンの音だった。

ピンポン

人が訪ねてくる予定なんてなかったので、ちよつと面倒に思いつつも腰をあげた。

「どなたですか？」とドア越しに声を掛け、ドアスコープから来訪者を覗き見る。

そこに立っていたのは、まったく見覚えのない女性だった。「すみません。隣の者ですが。ちよつとお願いしたいことがあります」

隣……？

そつえば、隣に住んでいる人なんて見たことがなかったな。

引っ越してきた時にも隣近所への挨拶なんてものはしていないし。
「どうかしたんですか？」

相手は気弱そうな女性とは言え、やつかいごとを頼まれたらちょっと嫌だななんて思っ、ドアを開けるのをためらった。内容によつては理由をつけて断ればいいだろうが。

「ビンのふたが固くて開けられなくて……。ちょっと手伝ってもらえないでしょうか？」

ビンのふた？ 俺は思わず気が抜けた。ドアを細く開く。

女性はぺこりと頭を下げた。俺と同じくらい、二十代前半だろうか。

休日だし、どうせ家でゴロゴロしてただけなので、そのくらいなら俺だつて手伝つてあげられるが。

どんな人が住んでいるかもわからない隣の部屋にそんな理由で助けを求めに行くなんて、ちょっと警戒感がなさすぎなんじゃないのか、なんて俺は思った。でも、世の中にはいろんな価値観の人がいるしな。

「……いいですよ。ふた開けるくらいなら」

俺はドアを大きく開けて外に出る。

「わあ。ありがとうございます。じゃあ部屋にビンが置いてあるので、ついて来てください」

ほつとしたように彼女は言つて、先にたつて歩いて行く。

ん？

てつきりここに持つてきているもんだと思つたんだが……。

しかし、引き受けてしまったんだからしょうがない、と俺は後から着いていった。

隣なんて数歩で着く距離。

彼女はなぜか俺に鍵を渡し、

「開けてください。ピンは家の中なので」
なんて言う。

いぶかしく思つたが、反射的に受け取つてしまった鍵で彼女の家

の鍵を開け、ドアを開いて彼女を中に入れた。

「どうぞ、あがってくださいね」

そう言う彼女に素直に従う。

入る前に「木下」という表札が目に入った。

ふん。木下さんっていうんだな。そういえばまだお互いに自己紹介もしていないもんな。

思いながら俺は木下さんについて部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。

彼女は、履いている少し厚底の靴を脱がずにそのまま家の中に入って行く。

土足？

靴を脱がずに生活するようなオシャレな造りのアパートではないんだけど……。

思いながらも彼女に倣って俺も靴のまま上がることにする。

そして、なんて言うか……殺風景な部屋である。

俺の部屋と同じ造りだが、生活に必要なもの……例えばベッドやタンス、冷蔵庫などが仕方なく置かれているという感じで、余分な装飾品は一切ない。女性の部屋にしては不自然なくらい物が少ないな。

俺はそんな事を思いながら、ぼやっと突っ立っていた。

「鍵！ちゃんと閉めてくださいね！」

急にきつめの口調で言われ、俺はハッと我に帰る。

「ああ。はい……」

ドアを振り返って、鍵を閉めた。

「で、ふたを開けてほしいうて言うピンはどれですか？」

「あ。今出そうかと思ったんですけど、ちょっと、取れなくて……。すみませんけど、手伝ってもらえませんか？」

言われて、木下さんの方を見ると、どうやら高い位置にある棚からピンをとろうとして、手が届かないみたいだ。

なんでそんな場所に片付けちゃったんだろう？

「俺が取りますよ」

彼女の横から手を伸ばして、棚の上の結構大きいビンを手取る。片手でなんとか掴める大きさが意外に軽い。

透明なガラスビン。その形からしても、中身は……ジャムだろうか？ イチゴジャム？ ……にしては色が赤すぎるような。ラベルなども貼っていないし。

あれ？

しかも、それが透明なフィルムでラッピングされたままだということに気付いた。

普通、ビンのふたが開かないっていう時は、こういう包装を外してから言うもんだらう？

俺は木下さんの方を見た。不思議そうに見つめ返してくる木下さん。

「これ、まず外装を取らないと……」

「やだ。忘れてました」

につこりと言われた。

天然なのか……？

それ以前の問題のような気もするが。

とにかく、ふたを開ければいいんだよね？

まずはフィルムを取ろうとしたが、なかなかうまく破ることができない。木下さんに断って、台所にあった包丁でフィルムに切れ目をいれてそれを取り去った。

木下さんはそれを食い入るように見ている。

そんなに見られてもなあ。

思いながらも、ようやくビンのふたに手を掛けて……その時だった。

ガラスの割れる物凄い音が響いた。

なんだっ！？

反射的にベランダの方を見る。

そこには、黒い服を着た男が立っていた。

彼はすばやく割れたところから手を入れてガラス戸の鍵を開けると、部屋に侵入してきたのだ。

あまりの素早さに、俺も木下さんも、ただ、ぽかんとその男が入ってくるのを眺めるだけだった。

何が起こってるんだ？

強盗にしたって、こんな昼間から、明らかに人がいる室内に堂々と入ってくるなんておかしいだろう。

まあ、俺だって男だ。木下さんをかばうように前に出る。

「なんなんだ、お前は！？」

他に気の利いたセリフなんて思いつきやしない。

男は俺のほうを見た。というよりは俺の手の中にあるビンを見ているようだ。

「君！ そのビンを開けてないだろうな！？ 無事か！？」

は？ ビン？ 無事か、と言われても……。

「まだ開けてないですけど」

危害を加えられるのを避けるためにも俺は素直に返事をした。

男は安堵のため息をつく。

このビンがどうしたというんだろう？

「貴様、ウィルスの入ったビンをこの男に開けさせるつもりだったんだな。この部屋の鍵をどうやって開けた？」

今度は、男は俺の後ろにいる木下さんの方に向かってそんな質問を投げかけた。俺は彼女を背にしているから表情はわからないが……

……って、ウィルス！？ 一気に話が見えなくなつた。

でも振り向いて木下さんの表情を確認するのも怖くて、俺はそのまま男に対峙していた。依然、男の視線は俺を通り越して木下さんを見据えている。

「こんな簡単な構造の鍵、同じ物なんてすぐにつくれるわ。あとはこの男にビンを開けさせれば目的を達成できたのに」

俺の背後からは、さっきまでののはほんとした雰囲気とは一変して、苦々しげな木下さんの声が聞こえてきた。

こうなると、「木下さん」なのかどうかあやしいものだが……。
頼みの綱が切れたような気分で、俺はゆっくりと振り向く。

彼女も俺を見ていない。男の方を凝視している。

たまらず、口をはさんだ。

「ちよつと！　どういふことだか説明してください！」

ようやく、俺がここにいることを思い出したかのように二人が俺の方を見た。それはそれで、急に居心地の悪さと、なんだかよくわからない恐怖感がわき上がって変な汗がでてくる。

そして、口を開いたのは男のほうだった。

「ああ。巻き込んですまない。そのビンには、ある研究所で作られたウイルスが入っている。ふたを開ければたちまち拡がって、死に到る人が続出するだろう」

……男は至極まじめに言っている。

そんな馬鹿な、と笑ってビンを開けるなんてことはできなかった。

「なんで、そんな……。もしそれが本当ならその研究所で、もっと嚴重に保管されてるはずでしょう？」

俺はからかわれているんだろうか？

「その男が研究所から盗んだのよ。私はビンを取り返しにきたの。もしくはそのウイルスをばら撒くことができればそれでよかったんだけど」

今度は木下さんが話し始めた。

……やっぱり、きつと、これはなにかの、ドッキリ企画とか、そういうものに俺は巻き込まれてるだけ、だよな？

「そんな危ないウイルスをばら撒いたら、あなただって無事じゃすまないでしょう？」

手に持ったビンを握りなおす。

「そのウイルスは地球人だけに作用するのよ。私には効かないわ」

「そいつらの目的は、混乱に乗じて地球を征圧することだ。それを防ぐために、私はウイルスを盗み出しこの場所に隠したというわけだ」

木下さんと男の言うことを信じるとしたら………宇宙人ですか！？

いやいや。話に色々おかしい点がある。

それに、なんでこんなアパートの台所にそんな危ないものを隠したのか、合理性がない。

ピンを開けてしまえば手っ取り早く話が本当かどうか分かるが、軽々しくそんなことできないような緊迫感が漂っているのだ。

「あのー。なんで俺にこのピンを開けさせようとしたんですか？」

誰とも目を合わせずに、俺は聞いた。

その質問には、ため息とともに木下さんが答えてくれた。

「地球人以外がこのアパート内の物に触れると、消滅してしまう仕掛けがされているの。ドアや壁にも触れられないわ。最善のセキュリティティってとこね」

……確かに、彼女は俺が知る限りこのアパートのどこにも触れていない。

「床にも触れられないから、特別な靴を作らせたんだけど、こんな厚底じゃないと影響を防ぎ切れないし」

ああ。だから土足……。

「でも。合鍵を作ったって……」

「それは、衛星からアパートの情報を取り寄せて、研究所で作らせて持ってきたのよ。ここを探し出すだけで何年もかかっているんだから、合鍵を作るくらいあつという間だったわ」

そっぴいもんですか。

木下さんは俺に氣を取られて、男への注意が少し逸れていたのかもしれない

男がいつの間にか懷から出した、光線銃のような機械から光が放たれ、俺の持っていたピンに狙い違わずに当たったのだ。

「うわっ！」

驚いて思わずピンから手を離してしまった。

落ちるっ！　と思つて慌てて手を出したが、ピンは床にぶつかる

前に一段と強まった光の中に消えていった。

「しまった！」

木下さんがそんな風に言うのが聞こえた。

なにがどうなったんだ？

「ピンは別の場所に移した。我々のボスが、地球との共存の道もあるはずだと研究所の所長を説得中だということは知っているだろう？」

男は、木下さんを睨みつける。

「ええ。もし説得されてしまえばウィルスの威力をためすことができなくなるわ。だから急いで探し出したのに！」

悔しそうに言う木下さん。

「お前達のような奴が研究所内にいるから、私は仕方なくウィルスを盗み出したんだ。ピンを開けてしまえば取り返しのつかないことになるところだったんだぞ。今からお前にも一緒に我々の拠点に来てもらうからな」

言って、先ほどの光線銃を木下さんに向けて構えなおす。

恐らく光に当たった物をどこかにワープさせる効力があるのだらう。

「残念だったわね。そうはいかないわ」

木下さんの声が一段と低くなった気がする。

ふと見ると、彼女の横に包丁が浮かんでいた。どうやら木下さんが手にしている小さな機械のようなもので操っているようだ。

「何をする気だ！？」

男の問いには答えずに、木下さんは不気味にたたずむ。

そして、包丁が男に向かって突き進んだ！

男はそれを避けようとしたが、スピードにのった包丁は勢い良く男の胸に突き刺さる。

男は、しばらくは苦しそうなうめき声をあげていたが、そのうち倒れて動かなくなった。それを見て、ようやく事の重大さが俺の頭にも浸透してくる。

「ど……どうするんですか！？　この人死んじやったんじゃないんですか？」

パニックになる俺をよそに、木下さんは落ち着いたものだった。
「アパート内の物に触れられないことに加えて、この部屋の中では私達の惑星の機器類が使えないように細工がしてあったはずだけど、この男が部屋に入ってくるときにそれを解除していたから助かったわ。こんなちっぽけな遠隔操作の機械なんて、最初にインターホンを押す時にしか使わないと思ってたのに」

俺に言ったのか独り言なのか分からないが、木下さんは手の中の機械をいじりながら言う。そして、

「私は他にもやることがあるから」

と、開いていたガラス戸から颯爽と出て行く。

「ちよつと、待ってください！　この状況をどうしたらいいんですか！？」

すぐるように俺は言ったが、彼女は歩みを止めない。

「悪いけど、後はよろしく。ガラス戸は直していくわ」

そう言うのと、俺の目の前でまるで巻き戻し映像のように、割れていたガラスが元に戻っていった。

呆然とする俺と、ベランダから外へひらりと出て行く木下さん。

……かくして、俺は男の死体とこの密室に取り残されたのだった。

ガンガンと、警官がドアを叩く音がずっと続いている。

「木下さん！　ドアを開けますよ！」

管理人も駆けつけた様子だ。きつと合鍵をもってきたんだろう。

俺は、地球は宇宙人に狙われているようです、とでも言えばいいだろうか。

……　本当のことを言うべきかどうか。

選択肢は多くはない。

玄関で、鍵ががちゃりと開く音が聞こえてきた。

私の友達

その日教室に入ると、ひとつの机の上に花瓶が置かれ、花が飾られていた。

少しして教室に入ってきた担任の先生は普段には見せないような暗い顔で教壇に立つ。

「今日は悲しいお知らせがあります。もう知っている人もいるかもしれませんが、みなさんのクラスメイトの一人が昨日事故に巻き込まれて亡くなりました……」

私はそれを聞きながら、笑みが浮かびそうになるのをこらえるのに必死だった。先生の話はまだ続いていて、教室の中もしんみりとした雰囲気になっている。

そんな様子をこっそり見回しながら、私は再び花瓶の置かれた机に目を留めた。

死んだのは、私のことを嫌って最近なにかと絡んできていた鬱陶しい女だ。

私は人と話すのが苦手で、クラスでは多少浮いていると思う。別にそれはかまわなかったのだが、あの女はわざわざ私の机に落書きをしたり、ノートなどを隠したりと嫌がらせをした。暗い奴だからという理由で。

いわゆるイジメである。

この前も突き飛ばされ、落ちたカバンを踏み付けられたりと、私は惨めな思いをした……。そのカバンには今でもうつすらと踏まれた足跡が残っている。

そんな女が死んだところで同情できるはずもない。

いや、それ以前に彼女を死に追いやったのはこの私なのだ。

私の願いを聞いてくれるクーちゃんに頼んで。

クーちゃんは小さなクマのぬいぐるみで、普段からいつも携帯のストラップとして持ち歩いている。

まあ、いい歳してぬいぐるみにクーちゃんもないだろうと自分でも思うが、小学校に入る前からずっと一緒に、もうその呼び方が定着しているのだ。

その頃は携帯なんて持っていなかったが、カバンに付けて持ち歩いていた。

……まず最初は私のおばさんだった。

両親が共働きだったのでよく留守を任せていて、私と二人で留守番をすることもたまにあった。

両親にはいい顔をするおばさんは、当時幼稚園児だった私には冷たかった。

理由はわからないが、あまり懐かなかった私を疎ましく感じていたのだろう。

そして二人で留守番をしていたある日、言うことを聞かなかった私に腹を立てたおばさんは、私のおもちや箱を庭にぶちまけた。

中に入っていたのは大事にしていた人形や、お絵かきセットとかだったと思う。それを自分で拾えと、強制されたのだ。

酷い話だ、と今でも思う。小さかった私は逆らえずにおばさんの言う通りにした。

泣きながらそれらをかき集めていると、ふと、クーちゃんと目が合った気がした。

私にはそれ以前のクーちゃんの記憶がないのだが、きっと、箱の下の方に入り込んでいて忘れてしまっていたものが一緒に庭に放り出されたのだろう。私はクーちゃんが慰めてくれている気がして、思わず手に取ると、

おばさんなんていなくなっちゃえばいいのに！

……強く願った。

そのすぐ後だった。

おばさんは車に撥ねられて呆気なく死んでしまった。私は、嫌な人がいなくなつてよかったと思っただけだった。

次は小学生の時。

その時はイジメというよりは、ただ仲の悪い女の子がいた。いつも私にばかり意地悪なことをするので、ほんとうに嫌いだった。

一度は学校帰りに川に突き落とされた事もある。浅い川だったので大事にはならなかったが、ずぶ濡れの私を見て笑うその子を、憎いと思った。

私はふとおばさんの時のことを思い出し、なんとなく、クーちゃんにその子がいなくなつてほしいと願っていた。確信があつた訳ではないが、何か予感があつた。

そうこうしているうちにその女の子は川で溺れて死んでしまった。私を川に突き落とした罰だ、と思つていい気味だったのを覚えている。

そして、今回だ。

やはり、予感のようなものがあつた。

なので、教室に入つたときに花瓶が置かれているのを見ても大した感慨はなかった。当然のことのようにしか思えなかった。

クーちゃんは私の味方なのだ。

また、日が経った。

あの嫌な女がいなくなつてからはその取り巻きも私に興味をなくしたようで、平穏な日々を送っている。

私の携帯にはもちろんずっとクーちゃんが付いていて、いつも一緒だ。

なのに、私は最近またあの予感のようなものを感じていた。今までに、嫌いだった人間たちが死ぬ前に私が感じていた感覚がずっとつきまとっているのだ。

しかし今の私にはいなくなつて欲しいほど嫌っている人間はいない。

……思い当たることはある。この予感を感じ始めたのは、私が力ツターで紙を切ろうとしていて、たまたま机の上に置いていたクーちゃんの体を誤って傷つけてしまった時からだ。

車に撥ねられたおばさん。……それは、おもちゃ箱ごとクーちゃんを庭に放り出したあとのことだった。

川で溺れた女の子。

……私が川に突き落とされたときにはもちろんクーちゃんも一緒にずぶ濡れになっていた。

事故で死んだクラスメイト。工事現場の木材が倒れて、その下敷きになつたらしい。

……カバンを踏まれたとき、その中に携帯が入っていた。クーちゃんも中できつと苦しかっただろう。

私を苦しめた人たちは、同時にクーちゃんにも危害を加えていた。
いや。クーちゃんに危害を加えた人が死んでいった……？

私は……？

物言わぬ私の友達を少し遠くから眺める。

ただ……予感だけが徐々に強くなっていく……。

じゃあ誰が死んだの

屋敷の物置部屋の方から妻のエリスの声が聞こえたような気がした。

気のせいだろうと思い、僕はまた机に向かって書き物を再開する。しかし、また声。

今僕がいる書斎は、普段から廊下に反響した人の声が聞こえやすい。もちろん屋敷に出入りする者はそう多くはないし、使用人達は大きな声で話したりすることは滅多にないのだが。

聞こえてきたのは妻の妹のイリアの声のようだ。妻の声に似ているから錯覚したのだろう。

この屋敷はもともと妻の父のもので、父が亡くなってからは妻が主となっている。しかし、おっとりとしたエリスよりは私の強いイリアの方が実質的に屋敷内のことを取り仕切っている状態だ。

イリアにはエリスにない人を惹きつける魅力がある。

いつも我が物顔で屋敷内を歩いているイリアだが、物置部屋に来ることなど普段はほとんどない。それに声が聞こえるということは誰かと話しているのだろうが、相手は誰だ？

気になった僕は書斎を出て、声の方へ足を向けた。何とは無しに足音を忍ばせて廊下を進む。突き当たりがその物置部屋だ。

少しだけドアが開いており、そこから声が漏れ聞こえていた。しかし、先程書斎で聞いたような大きな声ではなくぼそぼそとした話し声なので、内容も聞き取れないし中にいる人物も特定できない。

何を話しているのか気になって、ドアの隙間に耳を近づけてみた。

「エリス姉さん、しっかりしてよ。きっとショックで記憶があやふやになってるのよ」

「イリア。……そうね。私、少し混乱してるのかもしれないわ」

思った通り、中にいる一人はイリア。

そしてイリアに弱々しく応えているのは、エリスだろうか……。本当に小さい声だ。

ドアを開けて中に入って行きたい衝動にかられたが、ひとまず様子をみようと僕はそのまま息をひそめる。

「姉さん、あたしを見るなり大声をあげるんだもの。驚いたわ」

「ごめんなさい。私、本当にどうかしてるんだわ」

「そうね。あたしが死んだと思ってたなんて正気じゃないわね」

「だって。確かに死体をこの棺に入れたのよ……」

会話を聞いて、僕の方も混乱してきた。

何故二人がこんな話をしているんだ？

なにかがおかしい。

エリスの言った「この棺」というのは確かに物置部屋に以前からあったものだ。

以前、劇団をしている友人に頼まれて作らせた演劇用のものをそのままここで保管している。十分な広さがあるので、他にも様々な物が置いてある部屋だ。

その中でも棺はかなりの存在感がある。

「エリス姉さんったら。じゃあ、このあたしが幽霊にでも見える？」
「いいえ。でも……でも。昨日の夜、ウィルと一緒にあなたを……」
「姉さんの夫と一緒に、あたしを棺に入れたって言うの？」

「……………」

「確かに、この棺の中に死体が入ってるのは間違いないわよ。でもそれはあたしじゃない」

「えっ？」

「今、姉さんがこの部屋に入って来る前、あたし棺を動かせるか試してたのよ。からっぽの時なら女一人でも、持ち上げるのはちよつと無理だけど押して床の上を移動させるのは結構簡単でしょ？」

「ええ。お掃除の時に私も手伝って動かしたことがあるわ」

「そうなの。でも今この棺はあたしがちよつとくらい押しても全然動かない」

イリアとエリスの間に少しだけ沈黙が訪れた。

僕はただその会話を聞いていたが、ひどく緊張してひどく混乱していた。

僕がエリスと共にあってイリアを殺したなんてとんでもない！
そのうち、部屋の中からはエリスの啜り泣く声が聞こえてきた。

「今からこの棺を誰にも気づかれずに処分してしまわないといけないのよ。あたしだけじゃできないわ。エリス姉さん、泣いてないで手伝ってよね」

「どうして……？ 昨日、私とウィルはあなたを殺したのよ！？」
イリア、あなたはお金を湯水のように使って、何度言っても散財を

やめなかったじゃない！ 父さんの遺産だつて底を尽きかけてた！」

「……ウイルに何か吹き込まれてたのね。エリス姉さん、よく思い出して。昨日、ここで死んだのはウイルよ」

「え？」

「あたしと一緒に、ウイルを殺してこの棺に入れたでしょう？」

イリアは何を言ってるんだ？

僕は間違いないここにいるじゃないか。

僕が聞いていないと思つて口から出まかせを言っているのだろうが、何もかもがおかしい。

そう。確かに棺は処分しなくてはいけない。

死体の流した血は、うまい具合に絨毯が吸つてくれて床にはほとんど落ちなかったが、棺の中にはべったりと血がついている。それに血のついた絨毯も一緒に入れてあるのだから。

「じゃあ、この棺の中に入ってるのはウイルだつていうの？」

「そうよ！ きつと姉さんは優しいから罪悪感で記憶がねじまがっちゃったのよ。姉さんの夫のウイルはこの屋敷の財産を狙つた悪い奴なの！ だから殺してしまおうつて二人で決めたんじゃない！」

イリアがそう言うのが聞こえ、僕はカツと頭に血が上った。せつかく今まで潜んでいたのに、後先考えずに音を立ててドアを大きく開くと部屋の中に踏みいった。

僕の姿を見てイリアもエリスも驚いて目を見開いている。

「イリア、どういうことだ！？ エリスを殺して二人で新しい生活をはじめようって言ったのは君だろう？ だから昨日の夜、エリスの死体をその棺に……」

誰も何も言わない。

僕達三人の間には棺が横たわっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1916m/>

夢語り

2011年6月1日19時10分発行